

タッチ

2005(平成17)年7月27日鑑賞(東宝試写室)



監督=犬堂一心/原作=あだち充/出演=長澤まさみ/斉藤祥太/斉藤慶太/風吹ジュン/
宅麻伸/福士誠治 (東宝配給/2005年日本映画/116分)

第2章

モチないあなたも映画で擬似恋愛

……ご存知、昔の人気テレビアニメ番組が、夏の高校野球の季節を迎えて再登場！ 達也と和也の双子の兄弟と南の夢は、あの甲子園に行くこと。しかし、その先に立ちちはだかるものは……？ それは対戦相手ばかりではなく、南をめぐる兄弟のライバル心や揺れ動く南の女心……？ 『セカチュー』の長澤まさみ、そして斉藤祥太・慶太というホンモノの双子の兄弟を配しての、甲子園への情熱を軸とした兄弟愛とピュアーなラブストーリー(?)は、単純ながらとても感動的！ 近くの女性客からは嗚咽の声も……。

ある日双子の男の子が、そして……？

あだち充原作の『タッチ』の基本設定は、ある日、上杉家に双子の男の子が生まれた。そして同時にお隣に住む浅倉家にも女の子が生まれた。双子の兄弟の名前は達也と和也、そして女の子の名前は南。この両家と3人の子供たちはそりゃ仲良く、幸せな生活を送りながら成長し、今は高校生。3人の夢は甲子園に行くこと。そのため今、弟和也は野球部のエースとして活躍中だし、南も野球部のマネージャーとして奮闘中。ところがなぜか兄の達也は少し落ちこぼれ気味。それはなぜ……？

配役の妙が感動作を……？

『タッチ』は1981年から『少年サンデー』(小学館)に連載されたコミックで、テレビアニメや劇場版でも大人気の作品。私はそんなテレビ番組まで観るヒマはなかったが、その話題はよく知っている。そんな『タッチ』が今なぜ……？

それは、ひょっとして今がちょうど旬の適切な俳優にめぐり合えたためでは……？ ついそう思ってしまうほど、双子の兄弟の達也と和也を演ずる斉藤祥太と斉藤慶太という現実の双子の兄弟はいい配役。2人とも野球の基礎経験があるらしく、そのピッチング姿はかなりサマになりキマったもの……。さらに、年頃になってこの双子の兄弟から想われる南役には、あの『世界の中心で、愛をさけぶ』(04年)で大ブレイクした長澤まさみが、この年頃の、気持が微妙に揺れ動く女の子役を好演。特に後半は、兄の達也を中心として物語が展開していくが、その陰には必ず南が……。こんな絶妙な配役ができたことが、誰もが知っているこの物語を、今あらためて感動的な劇場映画にできた大きな要因では……？

野球を感動のドラマとするためには……？

今年はプロ野球の「改革元年」といわれ、セパ交流戦という初の試みが成功したようだが、その分オールスター戦の人气が今ひとつ、となかなかうまくいかないもの……。また私は、石毛宏典氏が四国で立ちあげた、「独立リーグ戦」に大いに注目しているが、それが定着し収益をあげ、さらに拡大していくためには、なお多くの努力が必要。

今年のセリーグでは、巨人軍の落ちこぼれぶりと堀内政権の行く先の短かさ(?)が、ほぼ確実。そしてまた、読売巨人軍を軸としたプロ野球という構造が根底から崩れ去ったと考えるべきことは明らか。それに比べると高校野球は……？ その盛り上がり方は、年によって多少のバラツキはあるものの、毎年違ったナマの感動ドラマを私たち日本人に見せつけてくれている。そして、野球を感動のドラマとするのは、何よりも選手たちのひたむきに努力する姿と真剣勝負のぶつかり合い！

南の初キスはどちら？

双子の兄弟であっても、少し年の違う兄弟であっても、兄が真面目タイプで弟がやんちゃタイプというのが一般的なパターンだが、この映画では弟の和也が真面目タイプで、兄の達也がちょっと横道にそれ気味……。野球についても、和也は兄貴のピッチャーとしての球筋のスゴさを知っているものの、達也がそれを

封印してしまっているから、今は和也が明青学園高のエースで、予選が始まれば和也の活躍ぶりが連日新聞紙上を賑わしている。これに対して達也はなぜかボクシング部に興味を示して頑張ったものの、新人戦で敗退すると、これもダウン……。こんな兄弟2人から好意を寄せられていることを、年頃になった南はわかっていて当然だから、南としても達也和也のどちらが好きなのかきつと天ベンにかけていたはず。そんな南が初キスを交わしたのは果たしてどちら……？

共同の勉強部屋はちょっとムリ……？

上杉家と浅倉家は大の仲良しで、何をするのも一緒。それはそれでいいのだが、ある時お互いの土地を出しあって子供たち3人が勉強する部屋を共同で建てたため、3人は高校生の今となってもそこで日常的に顔を合わせている。そりゃ、小さい時はそれでもいいが、孔子が「男女7歳にして席を同じうせず」と言っているように、思春期を迎えさらに高校生ともなれば、男女3人が1つの部屋で勉強しながら共通の時間を過ごすことにはちょっとムリが……。もちろん寝るのはそれぞれの自宅だが、今どきの高校生男女3人がこんな生活をしていればちょっとヤバイのでは……？

決勝戦前日は？

和也をエースとした明青学園高は順調に西東京地区予選を勝ち上がり、明日はいよいよ須見工業高との決勝戦。これをクリアすれば夢の甲子園だ。「南を甲子園に連れて行く！」という夢を実現させるため頑張ってきた和也は、決勝戦を控えて南に「勝利の女神からのキス」をおねだりした(?)が、南はあいまいな態度……。その夜の兄弟間の語り、翌日朝の兄弟でのキャッチボールと語り、そしてその中に入ってきた南を含めた3人でのキャッチボールというシーンの中に描かれる人間描写は、この映画を単なる「スポ根モノ」としない、ビミョーな人間観察の妙が……。

運命の決勝戦の日に悲劇が……？

悲劇はある日突然襲ってくるもの。それは1995年1月17日の阪神・淡路大震災

にしても、2005年4月25日のJR 福知山線脱線事故にしてもすべて同じ。そして、そんな突然の事故によって誰が犠牲者になるのかは、神サマしかわかっていないはず……？ 2005年7月7日と7月21日に発生したロンドンでの地下鉄駅爆破テロ事件と同じような事件が日本で起こらないという保証はどこにもないし、ひょっとして某国からのミサイルが飛んでくる可能性も否定できない。そんな悲劇が、「これに勝てば甲子園！」という決勝戦の当日に和也に襲ってきたのは何とも皮肉だが、これは単なる偶然ではなく、和也の心優しい人間としての気持が大きく働いた結果であることも事実。神サマはそんな和也をきっと天国に導いてくれるはずだが、残された野球部員は、家族は、南は、そして何よりも達也は……？

ここらあたりから、この映画のリアリティがグッと高まるため、あなたもより集中してスクリーンを注視することになるはず……。

2度目の決勝戦での闘いは？

今年、夏の甲子園を目指す決勝戦で、弟の和也に代わって明青学園高のエースとなった達也たちナインが対戦するのは、昨年和也の欠場によって大敗した須見工業高。7割の高打率と抜群の長打力を誇るその4番バッター新田明男（福士誠治）との勝負に勝たなければ、甲子園は見えてこない。1点リードした9回表、2アウト2、3塁で達也が迎えたのはこの新田。タイムを求めて内野陣を集めた達也は「敬遠」の方針を確認し、キャッチャーをはじめみんなはそれに同意・納得した。そしてそれはベンチが考えても、野球解説者の目から見ても当然の作戦だった。ところが現実……？

歌にも注目！

岩崎良美が歌った『タッチ』は大ヒットし、私も大スキだった曲。そんな曲をそのままカバーして劇中で歌っているのは、ソウル生まれの韓国人歌手のユンナ。さらにこの映画の主題歌『欲びの種』を歌っているのは、昔「JUDY AND MARY」のボーカルで、解散後今はソロ歌手として活躍している「YUKI」。わかりやすいスローバラードのいい曲だから、ぜひそれにも注目！

2005(平成17)年7月28日記